

鷗外の「高瀬舟」と芥川の「疑惑」

森鷗外の小説「高瀬舟」(大正5年)は、生命倫理で安楽死の問題を取り上げる際に、よく話の枕として引き合いに出される。ある役人が京都からの罪人を護送する高瀬舟の中で、弟殺しの罪で遠島になった若い男に話を聴くという内容である。不治の病で余命いくばくもないと覚った弟が、剃刀で自分の喉をかき切って自殺しようとする。しかしそれが果たせずに大変な苦しみの中にある。その現場を見た兄は、早く楽にしてやろうと自ら剃刀を取って弟を殺してしまう。血族殺しは重罪であるが、そのような切迫した状況が情状酌量されて、兄は遠島の判決を受けたのである。役人に自らの罪と罰を語るその男の顔は、なんの屈託もなく晴れやかであった。

「高瀬舟」とほぼ同じテーマを扱った小説に、芥川龍之介の「疑惑」(大正8年)がある。こちらのほうは、読む者に陰惨な印象を与える。実践倫理学の教師が地方に講演に来た際、一人の中年の男から妻殺しの顛末を聴くという内容である。その男は結婚間もない若い頃、濃尾地震のために、妻と共に倒壊した家の下敷きになったという。夫はかろうじて助かったが、妻は下半身を梁の下に挟まれ、動けなくなってしまった。そうこうするうちに火の手が迫ってくる。夫は、妻が苦しい思いをして焼け死ぬよりは、いつそのこと早く楽にしてやろうと、屋根瓦で妻を殴打して殺してしまう。ところが、彼は実は心の底で妻を憎んでもいたのである。もしかしたら、その憎しみがあって、妻をそのように殺害してしまったのではないか。夫はそのことをだれにも言えないまま、心の苦しみにたえず苛まれつづけた。しかし、再婚相手との結婚式の場で、花嫁を前にして恐怖に駆られ、ついに「私は人殺しです」と叫んでしまう。その日を境に、彼は人々から狂人扱いされることになった。

倫理学の範疇を超える問題

「高瀬舟」における弟殺しの兄は、確かに法的には罪を犯した。だが、それはあくまで、非常な苦痛を避けるためにやむを得ずやったまでのことだ。彼は良心の疾しさをなんら感じていない。その晴れやかな顔が何よりの証拠である。たとえ死罪が言い渡されても、彼は懲^{しやうよう}と服したことであろう。ここでの問題は安楽死をめぐる法理と倫理の関係に絞られ、それは十分倫理学の論議となる。

一方、「疑惑」における妻殺しの夫が苦しんだのは、まさに良心の呵責であった。彼が「私が手にかけて殺しました」と口外したからといって、重罪を科せられるわけでもない。あるいは、そのことによっていつそう同情が集まったかもしれない。それほど限界状況だったのだ。しかし、彼は心中で妻を憎んでいた。そして、その憎しみが大地震を利用して妻の殺害に至らしめたのかもしれない。この恐ろしい思いが彼を地獄のように責め苛んだのである。問題は安楽死をめぐる生命倫理的是非にはもはやない。いや、それどころか、通常の倫理学の範疇をすら超えてしまっている。

文学作品として見れば、「高瀬舟」よりも「疑惑」のほうがはるかに優れている。底知れぬ人間悪の深層に迫ろうとしている点で、何と言っても芥川龍之介は、我が国の近代文学作家の

中では一頭地を抜いていると言えよう。

狂気と悪魔的なもの

「疑惑」における夫が人々から狂人という烙印を押されたのは、そのようにするしか、正常な人々の生活世界、すなわち人間倫理の世界では対処できないからである。だが、この夫が陥った状況というのは、いつ何時だれにでも起こり得るものと言えないだろうか。小市民的な暮らしを送っていた者が、突如としてどうにもならぬ事態に巻き込まれ、思いもよらぬことを引き起こしてしまう。彼は、自分を狂人にしてしまったのは、どの人間の心の底に潜んでいる怪物のせいではなかったかと語る。その意味で、だれもがいつ狂人の仲間入りをしないとも限らないのである。

通常の倫理学は、そのような怪物を相手にできない。怪物を扱うことができるのは、人間の悪の深層を捉える実存の哲学である。キルケゴールは『不安の概念』の中でこれを取り上げた。彼はこの怪物を悪魔的なもの デモニック det Dæmoniske (das Dämonische, the demonic) と名付けた。悪魔的なものは善に対する不安である。ここでいう善とは、単なる道徳的な善のことではなく、自由の回復やそれによる救いのことを指す。そのような善を前にして悪魔的なものは、自らを閉じ込める閉鎖性、不自由さとして突発的に現われる。しかし、この閉鎖性というものは心ならずとも開かれていくものなのだ。それが可能になるのは、不自由の根底にある人間の根源的な自由が交わりを求めて、不自由の殻を突き破るからである。

「疑惑」における夫の姿は、まさに悪魔的なものの特徴を示しているものであった。自分の良心の呵責や犯した罪に耐えきれず、彼はついにそれを口にせざるを得なかった。そこに、悪魔的なものの相貌を垣間見ることができる。だが、それは同時に悪魔的なものを突破する契機にもなりうるのである。キルケゴールは、その様子は「夢遊病者が名前を呼ばれると目が覚めるのに似ている」と形容している。

このことは、「疑惑」を再読してみればよく分かると思う。夫が自らの「罪」を告白したのは2回あった。1回目は、再婚相手の花嫁の面前で「私は人殺しです」と叫んだときである。この時は彼の中の怪物が荒れ狂い、それがそのまま彼の言動に現われてしまった。そのため、人々は彼を狂人と名指さざるを得ないものとなった。2回目は、実践倫理学者の前で、これまでの顛末の一部始終を語ったときで、これが小説の本体をなしている。そのときまでには、彼の内なる怪物—悪魔的なもの—は白日の下に曝^{さら}されてしまっていた。そして、この話を語るに値すると見なした実践倫理学者に、彼はその恐ろしい状況と心の内を淡々と物語る。倫理学者は彼の話にも何も答えない。答えることができないのである。それほどまでに恐ろしい人間心理の暗部なのである。

だが、物語る彼のほうは、このときすでに救済のそば口のところまで来ていたと言えるのではないだろうか。というのも、まさに彼が自らの自由の力によって、閉鎖性と不自由さを打ち破っていたからで、だからこそ彼はその恐ろしい物語を語る事ができたのである。彼は決して狂人ではなかった。彼はただ悪魔的なものに囚われていたのである。